

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390200352		
法人名	株式会社 大洲産業		
事業所名	グループホーム清風		
所在地	〒866-0013 熊本県八代市沖町6番3873-1		
自己評価作成日	令和3年3月1日	評価結果市町村受理日	令和3年6月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和3年3月27日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様の生活歴や性格を把握し、一人一人の意志や価値観を尊重して支援しています。利用者様は今、何を考え行動されているかを考え、一人一人に合わせたペースで対応しています。また残存機能を生かせるよう、なるべく見守り自分で出来る事は自分でして頂くよう心掛けています。

介護の抵抗や帰宅願望、鬱傾向の方もおられますが、その都度、スタッフ皆でカンファレンスを行い、少しでも本人の意志に添えるように意見を出し合い支援しています。

また外出の機会を作るようにしていますが、今年はコロナ禍もあり外出があまり出来なかった分、スタッフがそれぞれ考えて季節ごとの壁飾りを自ら進んで製作しました。

研修の機会はあまりありませんでしたが、カンファレンス時にそれぞれが学びたい事を伝え、皆で話し合いをしました。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

同地域に法人3か所目となるグループホームが新設されたことで、当ホームからの職員異動などがあっているが、離職による異動は殆どなく安定したケアが実践されている。地域の同業者でつくる合同研修会では様々なテーマを議題とし、レベル向上を図っておりコロナ終息後の再開が期待される。コロナ感染症による弊害は家族との面会制限、行事や外出の機会を減らしてはいるが、ホームではできる限り入居者が外に出る機会を作り、人混みを避けながらの花見学や車中からの景色を楽しみながら、入居者に馴染みの地域へ出かける等職員の工夫が活かされている。現在は運営推進会議も書面審議としているが、通常開催時には入居者もホームの一員として同席し、地域交流の一つとしてオープンな会議を展開しており、再開が待たれるところである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	月に1回程度のカンファレンスを行い、スタッフ間で理念を再確認しながら、利用者に敬意を持ってケアを行うよう心掛けている。	法人理念を基にホーム独自の介護理念を作り、日々のケア指針としている。“その人らしい生活”を支えるための3項目の支援には、職員の傾聴の姿勢や残存機能の維持・継続のために安易に手を貸さずに待つケアの実践、入居者の尊厳を掲げている。職員は月のカンファレンスで理念に立ち返り、ケアに反映している。	入居者に寄り添った理念であり、年度末などに内容の一つひとつを改めて自身に問い直し、自己評価の機会とされることが期待される。また、ホームのパンフレットに介護理念を添付することで、啓発に繋がっていただきたい。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で、運営推進会議も資料のみの配布であったりと直接会っての交流は出来ない。また外出してもなるべく人が居ない所や車内からのドライブで対応している為、地域との交流は殆ど出来ない。	地域行事やホーム行事の中止により、日頃交流のある人々と直接的な関わりはなかったものの、天気の良い日は広い敷地やホーム周辺の散歩に出て、地域の雰囲気を味わうように工夫し、神社や外港などを車中から見学している。例年であれば運営推進会議にも入居者がホームの一員として参加しており、地域資源を活用した外出などが行われている。	コロナ終息後の地域交流の再開が待たれるところであるが、出来る事で地域との繋がりを保つ努力をしており、継続した支援を期待したい。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	民生委員の方より「今年は老人会や婦人会等の地域での会合や行事も出来ない。」との事。コロナ禍の為、今年は地域の人々ともあまり交流出来ておらず活かされていない。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で、2月に開催したのを最後に資料のみ配布で直接の話し合いが出来ていない。ご意見や感想があればいつでも連絡して頂くようお願いしている。ご意見や感想が頂けるような工夫を検討したい。	今年度は通常開催に代わり、資料送付による書面審議としているが、会議そのものは外部参加者を除き、職員・入居者により行われている。行政から資料に写真を掲載したらどうか？との提案があがったことで、入居者の普段の様子と一緒に送付している。資料は家族へも届けられ、ホームの情報発信に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	加算の関係や事故報告の連絡や報告書の提出などで、担当の方とはよく連絡を取っている。また分からない事などは積極的に尋ねたり相談したりとなるべく話す機会を作っている。	通常であれば行政の運営推進会議への出席により、ホームの現状を共有し、入居者が同居することで普段の生活ぶりを見てもらうことができている。管理者は書類提出や事故報告などに直接役所を訪れ、相談事に応じてもらいながら友好な関係を継続している。今年度も認定調査は実施されており、ケアマネジャーなど担当職員が入居者の現状を伝えながら、対応している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月に1回程度のカンファレンスを行い、問題行為やケアはないか、また問題に当たらないかを定期的にカンファレンスを行い話し合っている。また、話し合う事で身体拘束について考える機会を作っている。	運営推進会議で身体拘束適正化委員会を設置し、拘束へのホームの姿勢を示し、勉強会の内容や事例を通し共に考える機会としている。管理者は職員がストレスをため込まないように、メンタルケアの勉強会で意見交換を行い、自身の気になる点や、対処方法などについて有意義な話し合いを実施している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修の機会はコロナ禍により減ったが、テレビ等で報道される虐待のニュースを元に皆で話し合ったり、事業所内で少しでも疑問に思う事は遠慮なく伝えられるような関係作りに取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前は居宅のケアマネジャーをしていた為、学ぶ機会があった。ある程度の知識はあるが、それをいつでも必要な時は活用できるように定期的に研修に参加し、学び直していきたい。(管理者)		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	5月に管理者が変更となり、契約書を結び直した。コロナ禍であったが、利用者や家族と直接会い、しっかり説明出来たと思う。また一方的な説明にならないよう質問や疑問点はないか尋ねるようにした。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や担当者会議の際に意見要望は尋ねるようにしたり、少しでも話しやすい関係作りに取り組んでいる。今後は、アンケートや意見箱等を活用し、少しでも意見が引き出せるようにしていきたい。	面会が制限される中、家族からは入居者の様子を心配する声や、部屋の中が気になるなどの声が聞かれている。職員は家族の言葉に丁寧に応じているが、情報発信という点ではどうしても急を要することが先になってしまい、今後はホームからも積極的に発信することが必要としている。入居者の身体状況から家族の協力を得て、リクライニングの購入に至っている。	管理者は今後、家族アンケートを実施していきたいとしており、職員と内容を検討し取り組まれることが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	普段から、意見はないか聞いている。提案が出たら、カンファレンス時や必要に応じて適宜に話し合い、皆で納得した事を反映させるようにしている。大きく変わる事や金銭面に関わる事は代表者に相談している。	職員は普段から意見を出し合い、必要によって月のスタッフ会議で検討し、業務改善やケア向上に反映させている。地域の同業者と合同で開催する研修会は毎回議題を設定し、互いの情報を交換しながらホーム運営に反映させているが、今年度は中止されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職能評価シートの使用や普段の職員の仕事態度で評価している。今回は、コロナ禍で忘年会がなくスタッフから他の物で代用して欲しいという意見を管理者から代表へ相談した所、クオカードが支給された。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で研修の機会は少なかったが、管理者研修や防災管理者の研修は開催されたため、そこで得た知識はスタッフへアウトプットし、共有するようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム部会が、12月に初めて開催された。管理者になりやと他の事業所の管理者と交流する機会が持てた。今後も積極的に参加していきたいので、代表者にその意思を伝えていきたいと思う。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス導入前には、必ず本人様の意見を聞くようにしている。また利用者様とのコミュニケーションが困難な場合は、利用者の普段の様子観察や表情を確認したり周りのスタッフにも意見を求めている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族様に本人様の最近の状況やサービス導入の必要性を説明するようにしている。また、普段から状況が変化した時には連絡を入れるようにし、家族様の不安や要望がないか確認するようにしている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人様と家族様の意見や要望を引き出す為にも普段からの信頼関係構築に努めている。また難しい対応については、運営推進会議や市役所、包括支援センターへ相談するようにしている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	1人1人に適した役割を見つけ、一緒に作業していく事で、利用者の残存機能を発見したり、干し柿作りでは逆に教えて頂いたりお互いに助け合っている事を認識するようにしている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	通院付添いの協力や誕生日会にはプレゼントを持ってこられたりと本人様を大切に思っておられる事が伝わった。コロナ禍で、ただ面会制限するではなく、必要に応じて家族様への対応を工夫していきたい。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で、馴染みの場所には行けていないが、玄関口や窓越しでの面会を行うようにしている。また家族様や知人からの電話は、希望に応じて直接お繋ぎしている。	介護理念に入居者個々の歴史を尊重するといった内容を掲げており、職員はこれまでの入居者の生活背景や趣味、特技、好みを知り、支援に反映するようにしている。日課の新聞を読む方、馴染みのタオルを首に巻いて過ごす方、食事の盛り付けが得意な方など入居前からの習慣なども大切にしている。理美容支援はこれまで外出を兼ね地域の店舗に出かけていたが、コロナ禍により現在は訪問にて支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士が上手くコミュニケーションが図れるよう席の配置を変更する等して落ち着いて過ごして頂けるよう工夫している。またトラブルにならないよう常に見守り、必要に応じて職員が間に入るようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	この1年間での入退所がなく、対象者がいない状況だが、退所して終わりではなく、本人様家族様との関係を大切に、出来る限りフォローしていきたい。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	普段の会話から利用者の思いを汲み取るように努めている。またコミュニケーションが困難な利用者に対しては、言動や表情から本人の立場に立って考えるようにしている。	職員はリビングでの会話や入浴時、居室など入居者との1対1の機会を持ち、思いを引き出すようにしている。表現が難しくなられた入居者へは、日頃の行動や家族からの情報と合わせ、本人の意向に近づくよう努力している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	普段の会話やレクリエーションを通して「若い頃は、どんな仕事をしていたのか？どんな暮らしをしていたのか？」を尋ねるようにしたり、家族様から以前の生活歴を聞くようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の様子や定期的なバイタルチェックで心身状態の観察や就寝時間や起床時間など、介護記録や申し送りで一人一人の状態把握をするように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	作成前に本人様や家族様、担当の介護士に意見を聞くようにしている。また作成したら、スタッフにも確認してもらい、実行できるよう協力をお願いしている。	介護記録や朝の申し送り、カンファレンスなどで入居者の現状を共有している。新たな入居者には前事業所や家族からの情報をもとに、暫定でプランを立案し、ホームでの生活の様子からアセスメントして担当者会議では本人・家族の意向を聞きながら本プランを作成している。評価は3か月ごとに行い、入居者の現状に照らし内容の変更や追加を検討している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録や申し送り、また職員間で出た意見や気づきを情報共有し実践している。ただ、情報共有が不十分な時もあるので、反映できるよう情報共有の強化や時間をとって話し合う必要がある。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	スタッフによっては、その場面や状況に応じて柔軟に対応できている時とできていない時がある。お互いに意見や助言を出し合う必要がある。家族様との話はコロナ禍で十分に出来ていない。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	干し柿作りでは、利用者が率先して作ったり、庭に生えているつくしと一緒に取ったりした。あまり地域住民との交流はなかったが、紅葉見学やお宮参り等、密にならないよう工夫しながらドライブを行った。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診の必要性を感じた時は、連携している訪問看護や主治医に相談、家族様には現在の状況を報告して必要性を説明した上で、受診の判断をお願いしている。命に関わる時は、医療処置を優先している。	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援しており、3か所の医療機関による往診と、家族の対応による受診支援が行われている。受診結果を家族と共有し、相談にも応じている。往診時は管理者を中心に対応を一本化することで、共有方法が統一できるようにしている。また、週1回の訪問看護師とも連携しながら、入居者の健康を支えている。歯科については、必要に応じ訪問治療が行われている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	小さな気付きも職員間で情報共有し、毎週来られる訪問看護や月一の往診時に伝えたり、相談している。ただ、伝え方がスタッフによっては乖離している事もあるので、注意していく必要がある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された時は、必ず管理者が訪問し情報交換や相談に努めている。また退院前には入院時の様子を聞き、施設で対応できるか？また注意する点はないか？をしっかりと確認している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所前に大まかな方針は家族と話し合っているが、定期的に話し合いは出来ていない。今後、終末期のあり方は、早目に対応できるよう家族様とも話し合いの機会を設ける必要がある。	入居時にホームの指針をもとに自然な看取り支援に努めていることを伝えている。また、訪問看護との連携についても説明を行っている。今後は身体状況の変化時に加え、早めに家族の意向などを聞き取る機会の必要性をあげている。地域のグループホーム5事業所が集う定期的研修会の中に、重度化・終末期支援に関しても計画されているが、今年度は開催に至っていない。	今後も日頃の関わりを大切にした支援の継続に期待したい。また、合同研修会は感染症の終息がなければ開催は困難と思われ、ホーム独自で出来得る研修について検討されることが必要と思われる。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	9月に誤嚥で救急搬送された方がいた。管理者の自分があたふたしてしまい、周りのスタッフに助けられた。今後、初期対応の訓練を定期的に行っていきたい。またこの経験を活かして落ち着いて対応したい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時の避難計画や役割分担は行えているが、避難に必要な備品の準備や細かい所の対応は十分に出来ていない。夜間時の避難訓練等も行っていきたい。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	居室やトイレへ入る時はノックしたり、他者に聞かれないような質問(排泄等)は、小さい声で声掛けするようにしているが、時折、大きな声で声掛けしたり少し雑な声掛けになっている時もある。	入居者の尊厳やプライバシーに配慮した支援を共有し、入居者に安心して過ごしてもらえるよう努めている。リビングでの席は身体状況や相性なども考慮し決定している。また、一人で過ごせる席や、談笑できるソファへ誘導するなどその時の状況に配慮し支援している。呼称は苗字や反応などから下の名前でも対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の望む思いや行動をできるだけ尊重し、自己決定できるよう働きかけているが、入浴やトイレに行く事を拒む方もいて、介護士としてのジレンマを感じている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	就寝や起床、入浴など、定期的に声掛けはするが、なるべく無理強いのないよう支援している。また自分から行動するような声掛けを行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	鏡の前にくしや歯磨きセットを置いたり、定期的に訪問散髪に来てもらっている。また洋服選びを一緒に行ったり声掛けしたりしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	魚や肉、野菜がバランスよく取れるよう献立を考えたり、誕生日の方には好きな料理を尋ねたりしている。また出来る方は下膳や料理のつぎ分けなどお願いするようにしている。	献立は入居者の好みや肉・魚のバランスを考慮し、職員の担当制で作成し、専門店から配達されている。誕生日には家族に来訪を依頼し、一緒に食事をしながら祝っていたが、今年度は感染症の対応から実施されていない。入居者も盛り付けや下膳など出来ることで食への関わりをもってもらい、職員も同じものを摂ることで思いを共有している。	食材にもこだわりながら手作りされる日々の料理は入居者の楽しみと、職員にとっても活力になっており、変わらぬ取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の能力に合わせた食事形態や食事が進まない利用者には嗜好に合わせた食べ物の提供、工夫をしている。また覚醒やムセの有無等、状況に応じて介助している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアの声掛けや介助を行っている。歯磨きされない方もいるので、トイレ行かれたタイミングや声掛けの工夫で、なるべく行えるように対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	まだトイレで自立して排泄されている方が多いが、それを継続できるよう見守り観察している。夜間に失敗される方がいるので、夜間のみおむつで対応し、必要最低限にしている。	昼・夜基本的にトイレでの排泄を支援しており、現在、布やリハビリパンツで過ごされる方が中心であるが、身体状況からオムツを使用される方もおられる。排泄の状況はカンファレンスで共有し、昼夜、布やリハビリパンツの使い分けを検討し、不快なく過ごせるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	定期的な水分補給や毎朝ヨーグルトを提供している。下剤を服用されている方は、排便チェックを行い、必要に応じて浣腸や頓服で対応している。排便チェックが出来ない方もいるので把握していく必要がある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴が楽しい物となるよう浴室にラジカセを持って行き、懐かしい音楽を流したりと工夫している。また無理強いせず、時間を置いたり翌日に回す等、強制にならないようにしている。	毎回湯を入れ替え、一番風呂気分を味わってもらいながら週2～3回の入浴を支援している。入浴中は職員との会話や懐かしい音楽を流すなど工夫している。また、季節湯(菖蒲・柚子)も継続して取り組んでいる。身体状況からシャワー浴が中心の方には、保温など十分配慮している。入居者の中には拒否をされる方もあり、職員同士で声掛けを工夫しながら誘導している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	1人1人、好きな時に居室に入り休めていると思う。また希望を聞いてラジオをつけて休まれる方もいる。長く休まれている方は、安否確認や優しく離床を声掛けして気分を害されないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	利用者の内服一覧表で、職員がいつでも把握できるようにしている。また薬が変更時は、介護記録や連絡帳に記入し、情報共有の漏れがないようにしている。また変更時は様子観察を行い、変化に注意している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物たたみ等、家事の内容でも個人の好き嫌いがあり、本人が手伝いたいと思う事をお願いしている。またレクリエーション参加も無理強いせず、その時の雰囲気に応じて対応している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	なるべく園外散歩やドライブの機会を作っているが、コロナ禍で十分ではない。玄関や門は施錠せず、いつでも散歩に行けるようにしているが事故防止に一緒に付添ったり遠視にて見守りしている。	今年度は人混みを避けて車窓ドライブを中心にした外出に取り組んでおり、入居者の住まいの地区や近隣町などに出かけている。今年もドライブの中で桜を見る機会は持たれており、思い出の一枚が撮れたようである。家族の協力による外出も難しいが、感染症の状況を見ながらお気に入りの喫茶店へ行く事が出来た方もおられる。敷地内はゆっくり散歩や外気浴ができるスペースであり、近隣の散歩も様子を見ながら継続している。	恒例となっている天草などへの日帰り旅行も中止となり、入居者や職員も再開を楽しみにしており、感染症の終息が待たれる。また、継続できる敷地内の散歩や入居者の出番ともなる菜園の管理などに努めていかれる事を期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	小口は施設で預かっているが、小銭は自分で所持しておられる方もいる。買物へ行っても買物される方は殆どおられないが、先日はお宮参りで自分の小銭から賽銭を入られた方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	先方より電話があった時は、利用者に取り次いでいる。ただ自ら電話を希望されたり手紙を出したいと希望される方はいない。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地よく過ごせるよう大きな模様替えはせず、季節に応じた壁画を製作し飾っている。また直射日光があたる場所にはロールカーテンを設置に眩しくないようにした。ただトイレの空調は不十分なので今後検討していく必要あり。	リビングや廊下には季節の壁面作品や外出など思い出の写真を掲示している。ホーム内は高い天井で圧迫感もなくゆとりの造りとなっており、廊下も歩行訓練に活かされている。食堂を兼ねたリビングにはテレビが2か所設置され、それぞれにとって落ち着く場所で視聴されている。感染症への対応として、これまで以上に換気や消毒などに努めており、トイレの空調については検討課題に挙げている。	写真の掲示においては撮影日がわからないものもあり、記入をしておくことで入居者との会話のきっかけや、家族等の訪問時にもわかりやすいと思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファを数ヶ所に設置し、その時の気分でくつろげるようにしている。決まった場所で過ごす方もいれば、自席からソファに移られる方もおり、トラブルにならないよう声掛けや見守りをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使用していたタンスや椅子を配置。仏壇を置いておられる方やアルバムを持って来ておられる方もいる。大きな模様替えはせずに転倒防止の為、動線に注意して環境整備を行っている。	ゆとりのある居室内には、使用されていたタンスなどの家具や仏壇の持ち込みも行われている。馴染みや心の拠り所となる品があることで自分の部屋として安心して過ごされている。入居後は基本的に模様替えは行わず、安全面に配慮した物品の移動のみとしている。居室内の掃除や衣替えは現在、職員が中心に行っており、不足の品などあがればその都度家族へ依頼している。	今後も面会や訪問を控えてもらう状況は続くことが予想され、家族の安心に繋がるよう、居室内の様子についても小まめな報告が期待される。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの目印を貼ったり、部屋替えや大きな模様替えはせずに同じ環境で過ごせるようにしている。また紙パンツの方でも自分で交換できる方もいるので、居室へおいて汚染物だけ回収する等、少しでも出来る事は続けて頂いている。		